

要養護児童のためのグループホームにおける平面構成に関する研究

児童養護施設 グループホーム 平面構成
面積 共用空間 (LDK)

正会員 ○ 田原 香織 *1
同 金成 瑞穂 *2
同 石垣 文 *3
同 小野田泰明 *4
同 坂口 大洋 *5

1. 研究の背景と目的

近年の児童養護施設は、児童虐待問題を主な背景に児童の抱える問題の多様化や深刻化に遭遇し、子どもと家族の様々なニーズへの対応が求められている。

そのようななか、児童へのより良い支援が行える環境のひとつとしてグループホーム(以下、GHと略す)が注目されている。2000年の国制度施行等により整備が進められ、2007年には厚生労働省によりGHの拡充が明言されるに至った。しかし、GHの住環境に対する指針はもとより、その整備状況は把握されてきてはいなかった。そこで筆者らは全国調査に基づき、GHの整備実態を明らかにしてきたが^{文1)}、本項ではGHの平面構成に着目し、今後の計画に資する基礎的データの構築を目指すものとする。

2. 調査の方法

本研究では、GHを「1) 児童養護施設を運営する法人が運営し」かつ「2) 地域小規模児童養護施設、児童養護施設股分園型自活訓練事業、自治体が独自に定めたもの、法人が独自に展開するもの、のいずれか」と定義し、調査を行った(表1)。

3. 面積の構成

GHの建物は「木造戸建4-6LDK」のケースが多く、また延床面積は平均129㎡である^{文1)}。それを建物がGHの目的に設計されたか否かと、職員の勤務体制に分けて示したものが図1である。これより、GH目的に設計されたものはそうでないもの比べて延床面積が広いが、双方において住み込み体制のGHの方が延床面積が広くLDKの管理の割合は低くなっており、その分が職員居室にあてられていることが推測される。

面積に関するデータのうち、延床面積、児童一人あたりの居室面積、職員居室面積、一人(児童および職員)あたりのLDK面積を用いて主成分分析を行った(表2、3)。これより第一主成分は「面積規模」、第二主成分は「職員居室かLDKの充実」、第三主成分は「児童居室か職員居室の充実」と表す軸と解釈した。各GHの主成分得点を第1軸×第2軸にプロットしたものが図2である。その分散は面積規模の大きいGHではLDKがやや充実する傾向がみられる。一方で、面積規模の小さいGHでは、LDKよりは職員居室を確保する傾向が見られ、それは特にGH目的に設計されたものにおいて顕著であることが確認された。

4. 共用空間(LDK)の構成

次に、児童と職員の共用空間であるLDKの空間構成につ

表1 調査の概要

全国GHへのアンケート調査及び平面図の回収	
対象: 全国のGH(198カ所)	
期間: 2006年10月11日発送、11月11日〆切	
(〆切までに回答の得られなかった99GHに催促状再送(11月30日〆切))	
回収率: 69.3%(137/195)	

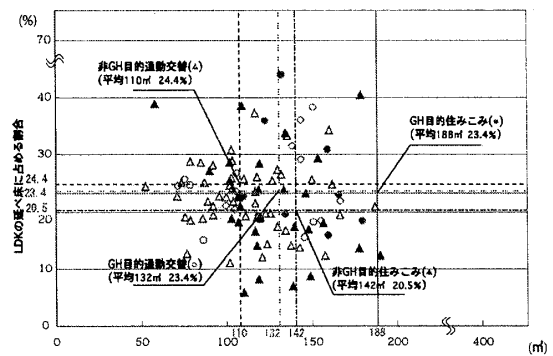


図1 延床面積とLDKの割合

表2 固有値、寄与率、累積寄与率

主成分No.	固有値	寄与率 (%)	累積 (%)
1	2.10	52.62	52.62
2	0.83	20.73	73.35
3	0.67	16.77	90.11

表3 固有ベクトル

	主成分1	主成分2	主成分3
延床面積	0.5824	-0.1838	-0.1925
児童居室一人当たりの面積	0.6347	0.0845	-0.6398
職員居室一人当たりの面積	0.4660	-0.5553	0.6018
LDK一人当たりの面積	0.3972	0.8067	0.4375

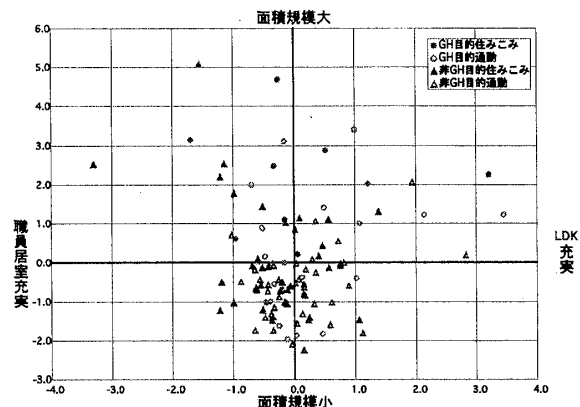


図2 面積構成の型

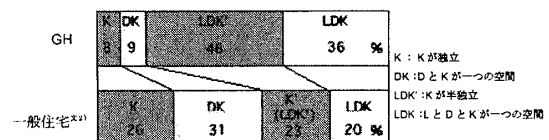


図3 LDKの空間構成

A study on Plan Type of Children's Home

TAHARA Kaori, KANNARI Mizuho, ISHIGAKI Aya,
ONODA Yasuaki, SAKAGUCHI Taiyo

いて分類した。それを一般住宅のデータ²⁾と比較すると(図3)、GHの方が一般住宅よりもLDKが一体となるオープンなプランが多く見られた。職員の子どもの見守りや両者のコミュニケーションのはかりやすさが考慮されていることと推測される。

5. 平面構成の類型化

次いで、GHの平面構成を現代住宅の型(①都市LDK型、②集合住宅型、③地方続き間型³⁾)を参考に類型化することを試みた。ここでは①のなかでも、主な児童居室への

動線にLDKを含むものをLDK型、廊下のみの中廊下型とし、延床面積の平均値129㎡で大小を分けた。またホールが大きく現代住宅の型に当てはまらないものはホール型として、7つに類型化した(表4)。

最も多い類型は中廊下型小であり約4割を占めている。中廊下型小と集合住宅型は都市部の古い借家が活用されたものが多い。一方、LDK型大とホール型はGH目的で設計された新しい持家のもの多く、特に前者は通勤交代制に、後者は地方の住みこみ制に見られる傾向が強いことが確認された。類型別の典型的な平面図は図4に示す通りである。

6. まとめ

グループホームの平面構成に関するデータを整理することで、GHにはオープンな共用空間が多用される一方で、実際にはGH目的に設計された新しく広い持家(LDK型大とホール型)と、民家を活用した狭く古い貸家(中廊下型小)2極化する傾向があるという状況を把握できた。今後は、GHを展開する法人の規模など運営面との関わりを考察し、またGHの実際の使われ方を明らかにすることで、GHの計画に求められる要件を示すことが課題である。

なお、本研究は平成18年度科学研究費萌芽研究(課題番号18656168、研究代表:小野田泰明)の補助を受けたものである。

参考文献 1) 坂口大洋ら「要養護児童のためのグループホームにおける地域計画に関する研究 その1」、石垣文ら「要養護児童のためのグループホームにおける地域計画に関する研究 その2」日本建築学会大会学術講演梗概集E1, P.167～P.170、2007 2) 北浦かほら「家族のあり方と台所に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集E1, P.41～P.42、2000 3) 鈴木成文「住まいを語る」建築研究所、2002

表4 平面類型別のデータ

平面類型	GH数	平均面積 (㎡)	立地環境		建物の築年数		建物の設計		所有形態		勤務体制
			東京都、政 令指定都市	その他	5年以内	21年以上	GH目的	借家	住みこみ		
中廊下型小	48GH(41%)	102.0	79	8	48	15	77	25			
中廊下型大	22GH(19%)	167.9	64	23	27	18	64	55			
LDK型小	13GH(11%)	91.6	23	23	38	15	92	23			
LDK型大	14GH(12%)	171.0	59	50	29	71	36	29			
地方続き間型	7GH(6%)	123.6	14	0	29	0	65	57			
ホール型	7GH(6%)	207.3	29	67	0	100	29	57			
集合住宅型	6GH(5%)	114.5	67	0	67	33	60	33			

(n=117 20GHの平面図は判別不可能であった。)

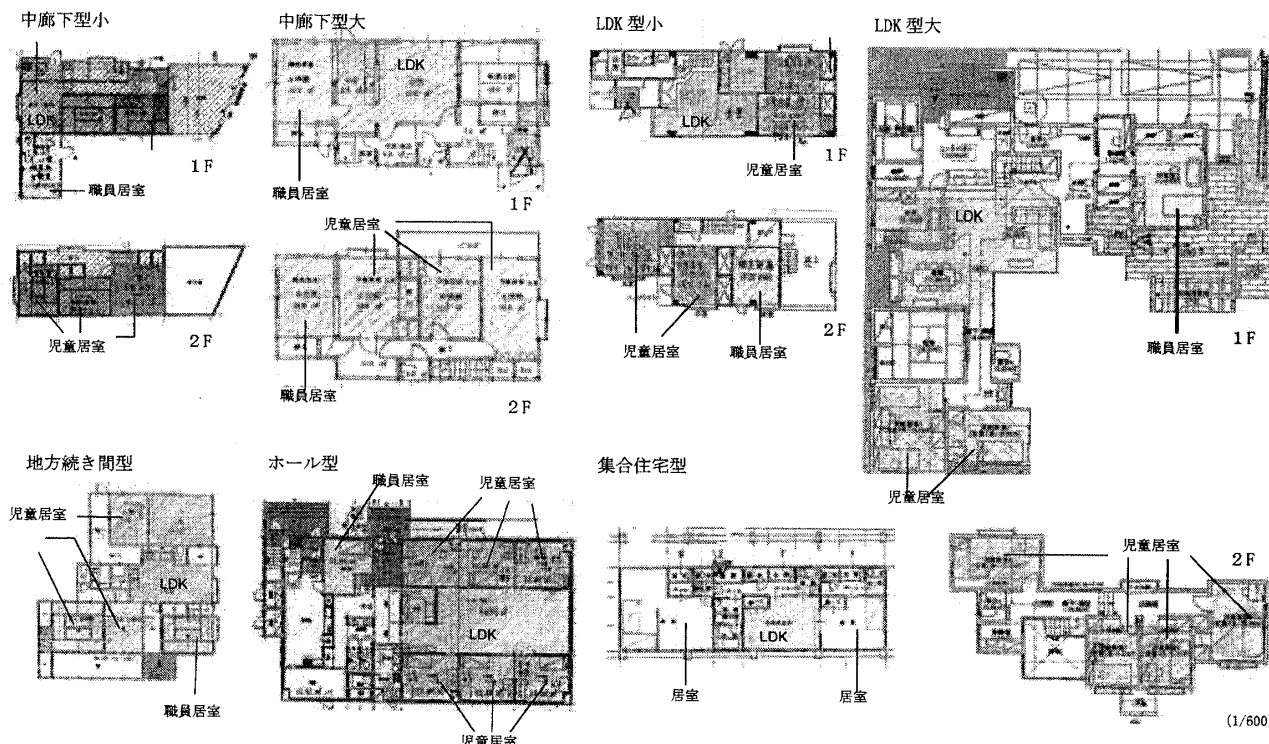


図4 類型別に見る平面図の典型例

*1 東北大学大学院工学研究科 博士課程前期
 *2 積水ハウス株式会社 工修
 *3 早稲田大学人間科学学術院 助手・博士(工学)
 *4 東北大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
 *5 東北大学大学院工学研究科 助教・博士(工学)

Graduate School, University of Tohoku
 Sekisui House, Ltd., M.Eng
 Res.Asso., Faculty of Human Science, Waseda University, Dr.Eng.
 Prof., Graduate School, University of Tohoku, Dr.Eng
 Assistant Prof., Graduate School, University of Tohoku, Dr.Eng